

相場の方向性を つかむことが 勝利への道

■プロセスを読むことが 経験的な直感を高める

相場評論は大体の方向性が把握できればよい、そして相場観も八割方合っているればよい。ということをお二人の先輩から教えられました。祖父である一目山人と、祖父から多くを学び取ってきた本誌執筆者、竹内一先生のお二人です。

一目山人は戦前の兜町において最も著名な株式評論家でありました。一般投資家などほとんどいない時代ですから山人の相場観は多くのプロを対象としたものであります。プロでありながら他人の相場観を参考にするのか疑問を持たれるかも知れませんが、当時の相場評論は諸個人の経験的な直感だったのでありま

す。

他者の相場観を読むことは、彼らにとっては同時にその相場観に至るプロセスを読むことでもありました。その結果として新たに直感を得る、または自分の相場観を確認する、ということが経験的な直感を高めていく一つの方法だったのだと私は考えます。

このような共通認識は時代の変化とともに薄れ、相場観の的中率を問題にする事のほうが多くなっているように思われます。

人の相場観や売買法によって相場する人は結局、経験すら積むことが出来ないのでありますが、このような人が存在する以上はむやみに信者を作ることを恐れなければなりません。

ですから相場評論は大体の方向性を握っていることが大事であります。同時に読者がそのプロセスをたどれるものでなければなりません。

■数少ない相場評論に

何年か経った後、読み返して見た時に新たな発見と感銘を得られるものならば、さらによいのであります。竹内先生の「株価予報」はその意味で極めて優れた、数少ない相場評論であります。経験乏しき人にそのプロセスをたどることは容易ではないでしょう。

今回、竹内先生と実業之日本社のご好意により本誌で一目均衡表について解説していく事になりました。既に竹内先生から多くを吸収している読者諸兄に均衡表を押し付けるつもりはございません。

しかし均衡表について理解して頂けれ

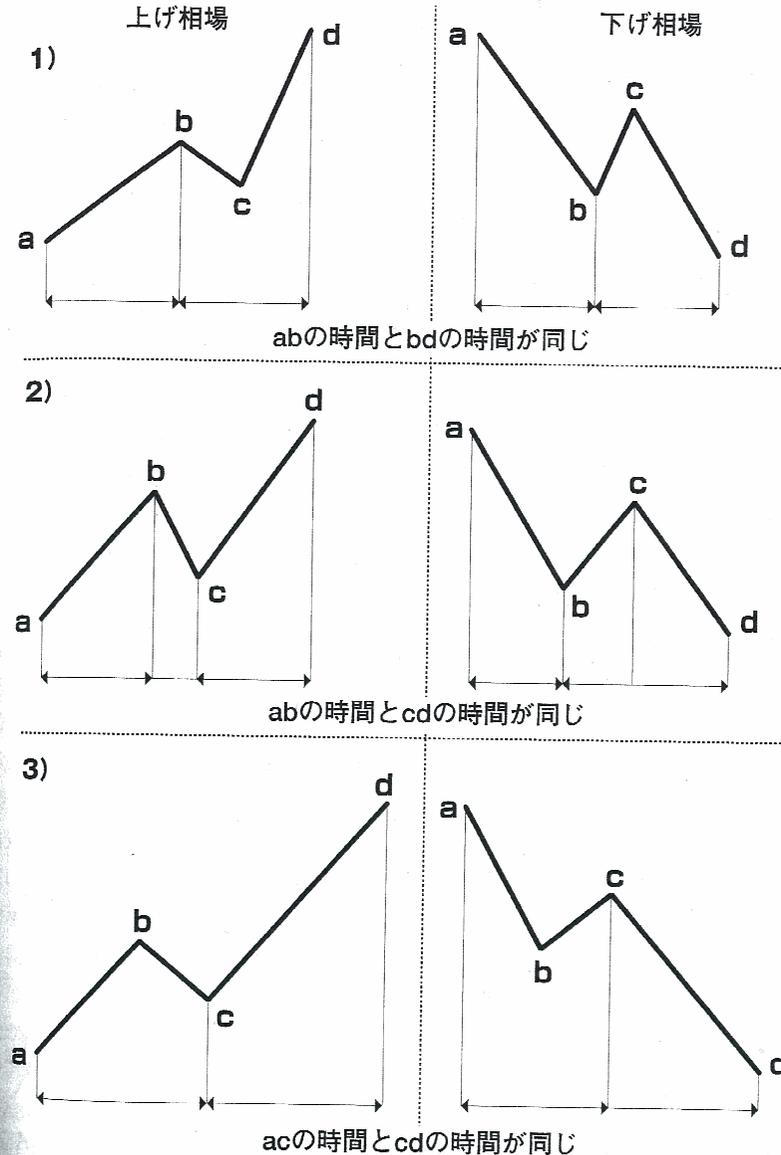
ば、経験に拘わらず竹内先生のプロセスをたどることが容易になるはずでありませぬ。ただし誌面が限られておりますので早飲み込みせず、じっくり研究して頂く

ようお願いします。

■相場変動論は時間を重要視する

早速ですが今回は均衡表の最も基本的な考え方についてご理解頂きたいと思

図1 基本三波動の時間関係



ます。

一目均衡表の相場変動論は値段よりも時間を重視するところに特徴があります。図1は基本三波動の時間関係を表したものであります。

上げ相場にせよ下げ相場にせよ、1) ~ 3) のような時間関係をとりながら方向性を変えていくものと想定していくのであります。1) はbを中心点として2) はbcを中心として、3) はcを中心点として時間関係が一致しています。

これを対等数値といいますが、今回は対等数で三波動を取ったものは方向性を変えやすいとだけご理解下さい。

対等数で三波動を形成しやすいことを理解すれば、相場の変化日を予測する事が可能になります。aからbまでx日間上げcまでy日間の押しを入れcから上げ始め

る。図1のような場合、1) bからx日後、2) cからx日後、3) cからx+y-1日後 (aからcまでの日数をx+yとするとb当日を二回数えることになってしまいます。ですから1を引くのです。) を変化日として相場の方向性を見ていくのであります。

もちろんdまで上げたものが必ず転換するわけではありません。これ以後、上昇する場合はcを出発点とした三波動、あるいはadを第一波動として新たに三波動を形成しながら中心点を変化させていくのであります。これは実際に日経平均株価の1989年高値からの変動を見てみるとわかりやすいと思います。

図2をご覧ください。これは月足の略図であります。1989年12月高値Aから2003年4月安値Zまでの下げ過程の時間関係を記してあります。天井AからBまでの下げは5

ヵ月間でありましたがこの下げ幅は天井までの13ヵ月間の上げ幅に相当します。いったん天井をつけて壊れた相場がこの5ヵ月間の下げで下げ止まることはまずありません。

下げの償却が転換のポイント

少なくとも図1のような三波動を完成し、下げの償却をせねば転換はしない、と考えるのです。この場合CからDまで5ヵ月間の下げによっていったん下げ止まっていますが、CDの下げによって、アク抜けしたのか、新たにCDの下げがしこりを残すことになるのかはその後の変動によってわかってくるわけです。

ですからAからの変動だけを見れば(天井までの上昇過程を無視すれば) F以降の何ヵ月かの変動は極めて重要なポイントであります。三波動を完成した後、ADの下げ11ヵ月と同じ時間をかけてDFで一応の底固めをしている。とみなすことが出来るからです。実際にはFもDも割りAからEまでの時間16ヵ月に対応するEからHまでの下げ18ヵ月で三波動になっています。

同じようにTの2001年3月安値の一月前、2001年2月は変化月として重要でありました。Gを出発点、Mを中心点とした三波動、Mを出発点、Rを中心点とした三波動の完成地点にあっているからです。

この場合も途中の経緯が重要でありまして、均衡表的思考法をよく訓練されている方は、この場所を変化月として重要視しながらも、大底とは判断しなかったはずであります。

三波動の完成は時間の一致がはるかに優先されますが、どのような値段を取っ

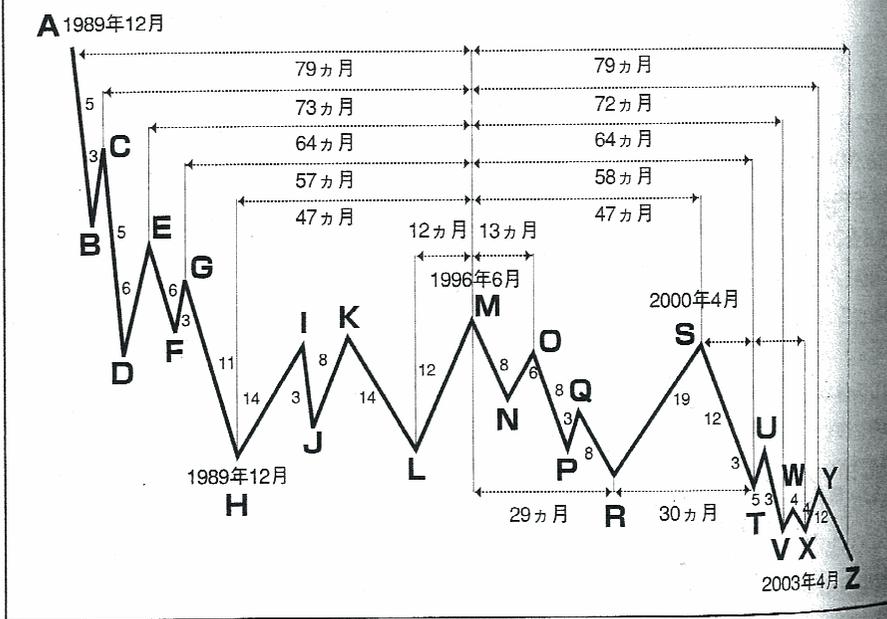
て三波動を形成するかという事も問題になってくるからです。とはいえこのような見方は均衡表においては基本的なものですから心にとどめておいて下さい。

さてこの図にはMを中心点として時間関係を載せておきました。AからMまでの79ヵ月が最も大きいものですが2002年の12月でその時間を既に経過しています。これによってMを中心点に置く事と、H以前の高値を相場の出発点として見る必要がしばらくなくなったわけでありまして。

ここまで月足のグラフを例に挙げてご説明しましたが、週足、日足も同じであります。2003年4月安値を中心点とした対等数値を週足、日足で注意深く追って頂ければ理解が深まるのではないかと思います。

今回は一目均衡表の総論でありまして、本来基本数値、対等数値、波動論、計算値、均衡表図表等について詳しくご説明しなければなりません。次回は基本数値についてご説明します。

日経平均株価の月足略図 (図2)



一目均衡表公式ホームページ開設
<http://ichimokusanjin.hp.infoseek.co.jp/index.html>
 原著のお求めは千代田書店もしくは経済変動総研 TEL0423-96-4383まで

細田哲生による
 一目均衡表初心者用講習会を
 開催しております。

平日コース
 10/3、11/7、12/5、1/9の計4回
 午後7時~9時

土曜コース
 10/11、10/25の計2回
 午後1時~5時まで

会費1万5千円 申し込みは経済変動総研まで



安値、高値を起点とした基本数値は重要な変化を伴う



■すべての基本数値は9と26の基本となる

前回、均衡表の最も基本的な考え方として、対等数値における三波動の完成が相場の方向性に大きな影響を与えることを説明しました。対等数値は実際の相場変動における高値から安値、あるいは安値から高値までの具体的な日数です。いわば過去の変遷の受動的な影響力を見ようとするものですが、基本数値はあらかじめいくつかの数値を設定しつつ相場の能動面を見ていくものです。

基本数値単純 9、17、26

複合 33、42、51、65、76、83、97、101、151、226など

これらの数値はすべて9と26を基本

にしています。

$$17=9 \times 2 - 1, 33=17 \times 2 - 1, 42=17 + 26 - 1, 51=26 \times 2 - 1$$

$$65=33 \times 2 - 1, 76=26 \times 3 - 2, 83=42 \times 2 - 1, 97=33 \times 3 - 2$$

$$101=51 \times 2 - 1, 151=51 \times 3 - 2, 226=76 \times 3 - 2$$

複合の場合なぜ1を引いたり2を引いたりするかは、前回の説明と同じでありまして、重複した日数を引いているのです。

図1をご覧ください。①も②も基本三波動を基本数値の日数で形成しています。①の17×2ではCを2回数えることになってしまいますから、1を引いて33。②の26×3ではB、Cを重複してしまいますから2を引いて76となります。

このような変動でDに至った相場の方向性がそのまま持続する（この場合は上げ相場）と想定するならば、CDを第一波動とした三波動か、ADを第一波動とした三波動の形成を考えるとになります。①の場合はCDの日数17、ADの日数33の影響力を見ることができます。

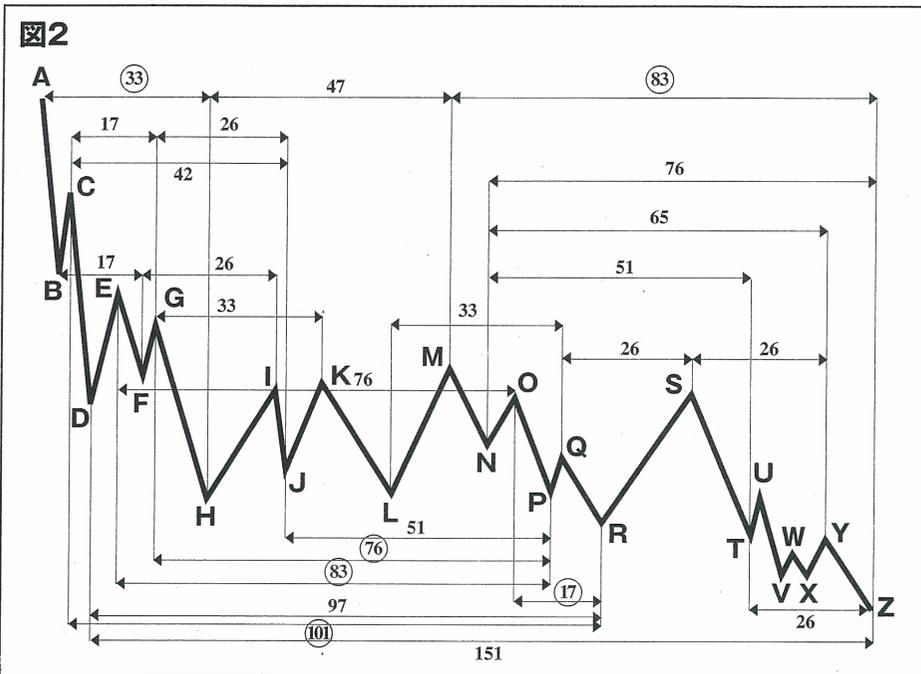
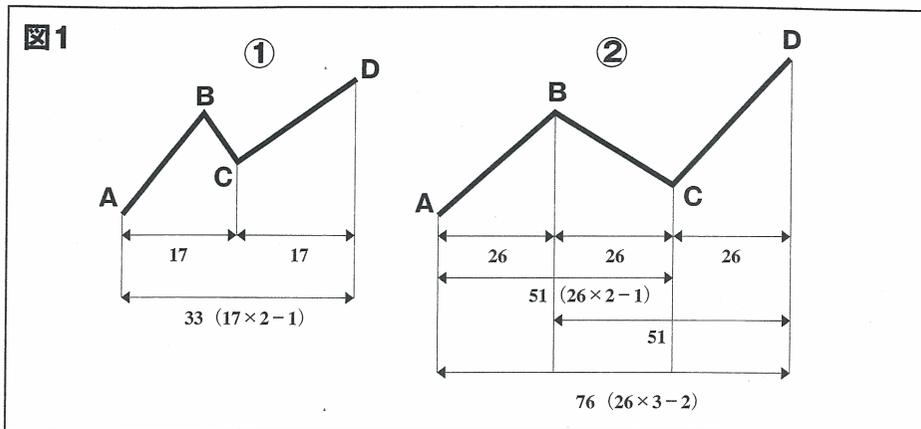
したがってD以降重要なのはDから17日目と33日目になりまして、Dから17日目はCから数えて33日目、Dから33日目はAから65日目となり、やはり基本数値であります。

具体的に前回と同様に平均株価の月足の略図で見てみたいと思います。図2は1989年12月大天井をAとした下げ相

場の変遷です。Zの安値が今年4月の安値であります。この変遷において確認しうる基本数値をいくつか載せておきました。グラフを書くときには高値、安値を付けた時を出発点としてあらかじめ9、17、26、33、42、51、65・・・と記入しておきながら実際の変動を見

ていくのであります。たとえばAからHまで33ヶ月の大きな下げであります。

Hを過ぎた時点でHを中心点、AHを第一波動とした三波動を考えてAから65ヶ月目、97ヶ月目は特に重要であることがあらかじめ認識できるわけです。



この図で見れば65ヶ月目は変化月として決まっていますが、97ヶ月目の次の月Pでいったん上げています。PはEの高値から83ヶ月目、Gの高値から76ヶ月目にあたるうえに、H、Lの安値を割るかどうかという重要な位置にありますから変化月として極めて重要でありました。

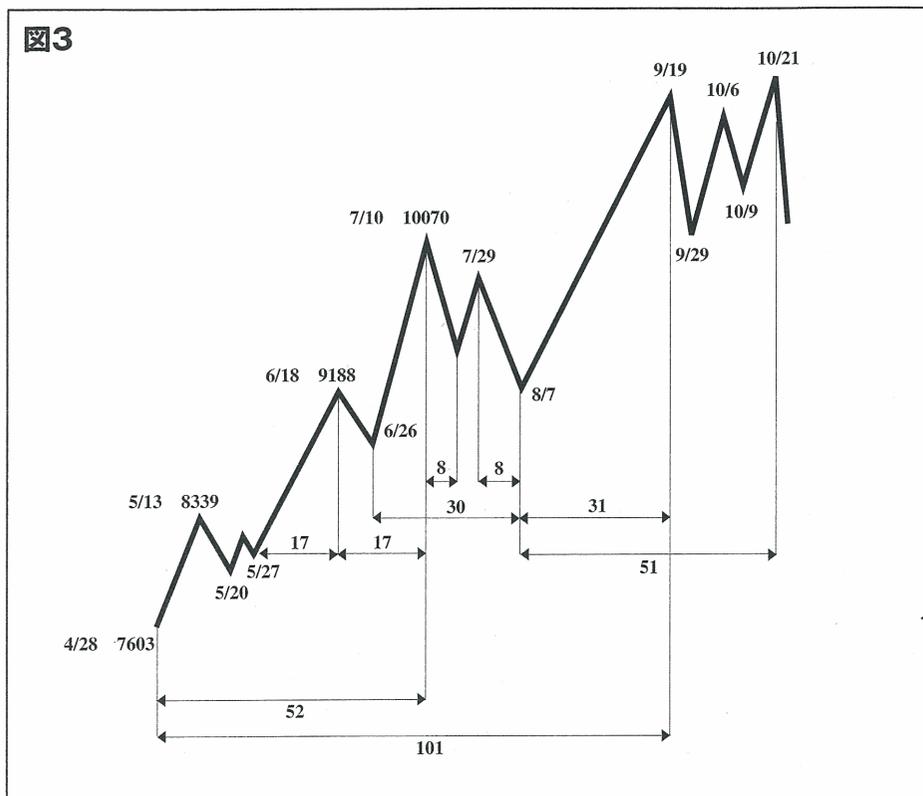
PからRまでの変遷においてP、L、Hを割ったことはさらに重要でありまして、このことを認識できていれば、S以降の暴落において大きな失敗はなかったはず（1998年以降の株価予報、竹内先生のコメントを読み返して下さい）。

■起点をどこにするかが極めて重要な問題に

さて今回は難しい説明はやめまして、基本数値における変化について理解いただければ充分です。実際にグラフを書いて、日数を数えてみて下さい。

基本数値も対等数値と同様に日足、週足でも活用します。四月安値からの日足の変遷を見てみましょう。

図3は平均株価03年4月28日安値から10月21日まで121日間の上げ相場の略図であります。4月28日から7月10日までの上げ日数は52日間で基本数値51に対応するものすから、当然101日目の9月



19日は注意すべき変化日でした。

9月29日は8月7日を中心点、6月26日を出発点とした三波動の完成点でもありますし、底値から既に76日間を経過していますから、いったんは相場から距離をおいて、次にはっきりした形が現れるまで静観すべきであります。

はっきりした形とは押し目の位置、再出発のタイミングはどうかということですが、結果的には7月10日までの上げ52日間を第一波動、8月7日までの押し20日間を第二波動、8月7日から10月21日までの上げ51日間を第三波動とした基本三波動を完成させました。

上げ相場で三波動を形成した相場に関して、その後の上げを想定する場合には、押しの限界を割らないこと（一目均衡表の転換線、基準線、先行スパンなどは原則的には押し目、戻りの限界を見極めるためのものであります）、もし割った場合は下げの三波動の形成（例えば7月10日から8月7日までの下げのような形）によって調整を入れるか、よほどの急騰がない限り10月21日を起点とした下げ相場について見ていかねばなりません。

基本数値を数えはじめる起点をどこにするべきか極めて重要な問題です。読者の皆さんに一応すべての高値、安値を起点として数を数えて頂きたいと思えます。

少なくとも8月7日と10月21日は起点として見て行って下さい。基本数値は三波動を見るだけでなく、もみ合い離れを見るものでもありますので、そ

の時々々の相場の位置で意味も重要度も異なりますので注意して下さい。

さて一目均衡表の図表の作成には基本数値9と26をフル活用するのですが、均衡表の図表についての説明は先送りにします。私はこれまで「押し、戻り」という言葉を使ってきましたが、この言葉のもつ意味が、というよりも使われ方が、一目山人が均衡表を発表した時代と現在では大きく異なると考えているからです。したがって今回は基本数値、対等数値を併せて波動論と計算値について御説明します。

今回は安値、高値を起点とした基本数値は重要な変化を伴いやすい、と理解して下さい。対等数値との一致はさらに重要です。とはいうものの、実際の相場変動が基本数値に律せられる以上、対等数値も基本数値で決まりやすいことは経験を積みばすぐに理解いただけます。

一目均衡表初心者用講習会のお知らせ。

2004年月一回程度、一目均衡表の初心者用講習会を開催予定です。詳細はホームページ上で告知いたします。経済変動総研にお問い合わせ下さい。

一目均衡表公式ホームページ
<http://ichimokusanjin.hp.infoseek.co.jp/index.html>

4つの基本波動を理解することが、客観的な判断を導く

■ 上げ相場、下げ相場は三波動Nで把握可能

均衡表原著で一目山人が述べているように、方向性を問題にするならば「相場は動くか、動かないか」「動くとするれば上げか、下げか」しかないわけです。

動かない相場とはもみ合いのことであり、もみ合いもまた上げと下げによって形成されることを考えれば相場は「上げる」か「下げる」かだ、と言うことになるでしょう。

これまでの2回で説明してきた基本三波動Nは、動く相場、つまり「上げ」と「下げ」を把握するための基本波動です。皆さん承知のように、相場が上げていく時に、安値から高値へは一直線に上げていくわけではありません。

図1のように必ず何度か下げ（押しを入れ）ながら上昇していきます。下

げの場合も同様に戻りを入れながら下降します。ですから上げ相場を安値、高値の切り上げ、下げ相場を安値、高値の切り下げ、と言い換えることが出来ます。

この図ではAからHまで7波動ありますが、これはAからDまでのN1、CからFまでのN2、EからHまでのN3というNの三連続と捉えることが出来ますし、ADを第一波動、EHを第三波動としたNでもあります。要するに、上げ相場も、下げ相場も三波動Nで把握出来るということなのですが、さらに重要な意味合いを含んでいます。

相場の押し、戻りは後から見れば確認することが出来ますが、その時点、C、E、Gの位置においては客観的に判断することが出来ないのです。

Cの時点での「BCが押しである」という判断は本質的には直感的な判断であり、この直感的、主観的な判断が時間の経過とともに客観化される瞬間こそが、一目均衡表における売買のポイントとなります。

ここではC、E、Gそれぞれの位置において、Nを想定することが、そのままその後の上げを想定することになると、理解してください。

波動論における基本波動、中間波動は客観化のための論理的装置ですが、そのことに関しては後で実例を挙げて説明します。

図2の中間波動は動かない相場、要するにもみ合いであります。P波動は内孕み、Y波動は外孕みとしてケイ線

のサインでは重要な意味を持ちます。S波動はローソク足で言えば寄り引き同時値と同じ意味合いでしょうか。これらの中間波動も結局はNとして認識せざるを得ない、と言うことを、P波動を例に説明します。

図3を御覧下さい。相場変動のあり方としては、

- (1) 上昇後、中間波動を形成し、上昇するもの
- (2) 上昇後、中間波動を形成し、下降するもの
- (3) 下降後、中間波動を形成し、上昇するもの
- (4) 下降後、中間波動を形成し、下降するもの

の4つしかないわけです。(1) は上げのNを形成し、(2) は転換後下げのNを形成、(3) は転換後上げのNを形成し、(4) は下げのNを形成します。

要するに中間波動の出現後はNの継続か、転換かのいずれかですが、転換もまた一種のもみ合いである事を考えれば、相場の転換には必ず中間波動のいずれかが出現することも理解頂けるのではないのでしょうか。

さて上げ相場はN、下げ相場は下げのNですから相場の転換は波動論的にはNから下げのNへの変化、下げのNからNへの変化、ということになります。

ここで方向性についてもう一度整理しておきますと

1 上げには素直に上げ方向として受け止めるべき上げと、下げ相場の戻りとして将来の下げを示唆する上げがある

- 2 下げも同様に素直に下げとして受け止めるべき下げと、上げ相場の押しとして将来の上げを示唆する下げがある
- 3 さらに上げと下げのあり方によってはもみ合いを形成する
- 4 このもみ合いも将来においては上げ、下げいずれかの方向が決定する

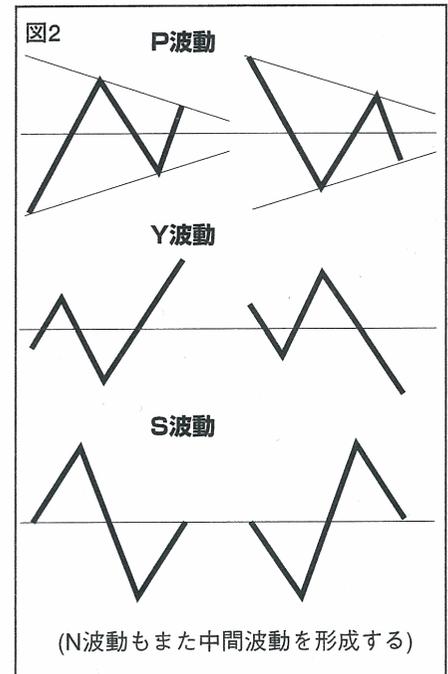
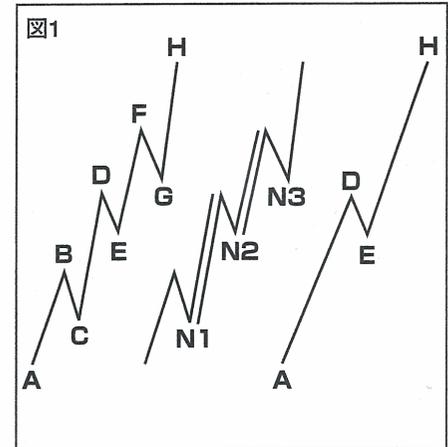
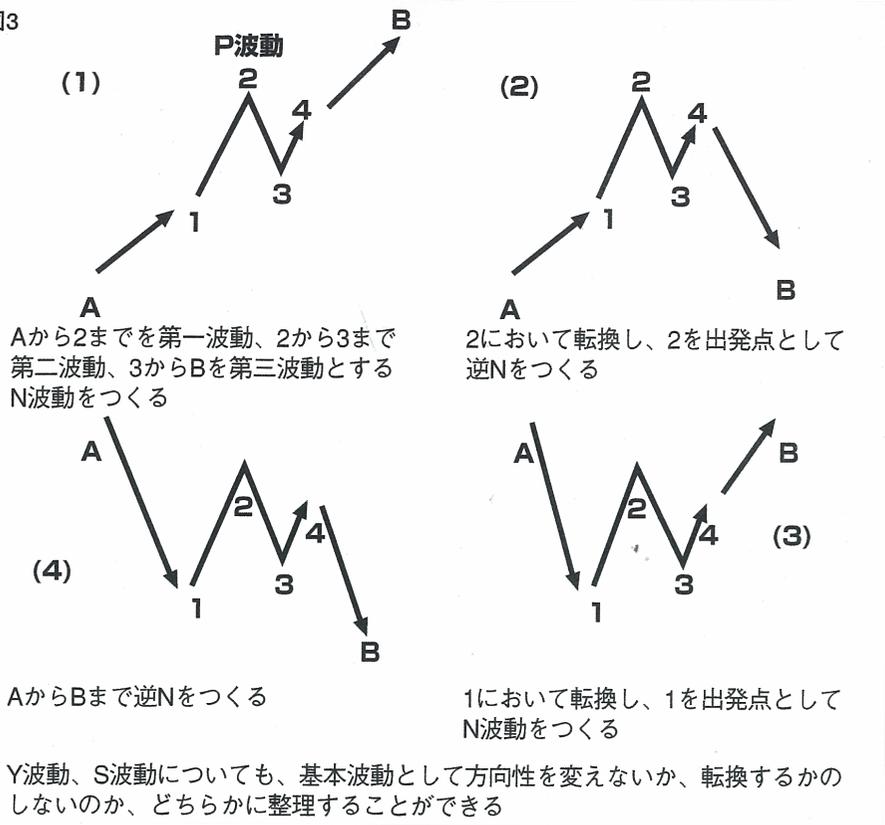


図3



実はこのことをきちんと理解しておかなければ、前回までご説明した基本数値、対等数値、今後説明する均衡表図表、変化日などをきちんと理解し活用することが、むずかしくなりますので、面倒ですがケイ線と照らし合わせてじっくり考えてみてください。

■ 押しの限界で反発するか否かが大きな判断基準

図4は平均株価2003年10月21日Aから2004年2月10日Nまでの変遷の略図であります。

Aまでの過程を一応無視して、この

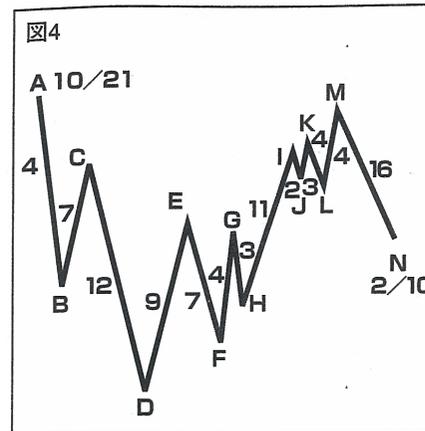
変動をどのように捉えていくべきでしょうか。

AからDまでは21日間で下げNを形成しています。ここで問題になるのはこの下げの三波動で下げ止まりと判断すべきか否か、です。

Dで下げ止まらないならばCDを第一波動とした下げのN、ADを第一波動とした下げのNが考えられるわけですから、Dから12日目（CDの下げ日数）とDから21日目（ADの下げ日数）の相場のあり方が重要です。

Dから9日間の上げ、Fまで7日間の下げによってCから見ても、Aから見て

図4



もP波動を形成しました。ここで初めて上げのNを想定出来ることとなります。

同時に下げのN波動の可能性もありますので、問題ともみ合い離れの瞬間がいつか、ということになりますが、中間波動の時間関係もこれまで説明した対等数値、基本数値の時間を見るわけです。

つまりDEを第二波動としてA、Cを出発点としたNの時間とDを出発点とした上げの三波動の時間を見定めていくわけです。F以後GHとさらにP波動を形成しました。

ここでのHは重要な位置でありまして（大勢観上重要なわけではありませんので注意してください）EH12日はCDの下げに対応し、DH20日はADの下げに対応、FH6日はEFの下げ7日に対応するものです。

さらに重要なのはHのポイントが一目均衡表図表における押しの限界（この場合は基準線）の場所でありましてここで反発していかなければ下げを

想定せざるを得ないということになります。

Aからの変動に限って言えばHからの瞬間的な反発を見てH以後の上げを認識出来れば良いのです。ここではDHの20日間とHMの20日間が対応しています。

次回はいよいよ一目均衡表の図表について説明します。この図表を理解頂くためには、動く相場と動かない相場をはっきりと分けた方が、都合が良いのです。

計算値については今回誌面が足りませんでしたので機会があれば説明します。

最近相場の時間関係を問題にする相場解説者が増えてきましたが、単なる数の一致をいくら見つけたところで相場の方向性をつかむことにはなりません。

今後変化日についてもコメントしますが、一目均衡表における変化日とは、仕掛けの場としての変化日と、相場の現在性を見極めるためのチェックポイントとしての変化日。という2つの意味合いがあります。くれぐれも早飲み込みせず、じっくり勉強してください。

● 一目均衡表初心者用講習会のお知らせ

2004年4月10、24日の午後1時～5時まで、一目均衡表の初心者用講習会を開催します。会費は1万5000円、お問い合わせは0423(96)4383か詳細はホームページのお知らせをご覧ください。

一目均衡表公式ホームページ

<http://ichimokusanjin.hp.infoseek.co.jp/index.html>